

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第831号 平成26年11月7日

オタク係数

「オタク」という言葉は、何かの分野に熱中して取り組んでいる人物を指していますが、この言葉の生みの親は作家の中森明夫氏で、1983年、漫画「ぶりっ子」のコラムに「『おたく』の研究」を掲載した事が始まりといわれています。

「オタク」という表現について、私は、家に引き籠って黙々と何かに打ち込んでいるからかなと思っていたのですが、どうもそうではなくて、中森氏がコミックマーケットに行った際、参加者が互いに「おたく」とか「おたくら」と呼び合っていたのを耳にし、彼等を多少侮蔑的に「オタク」と表現したもののようです。そのせいかどうかは分かりませんが、私達が、「彼（彼女）はオタクだから」というように表現する場合は、どちらかという仲間との付き合いが悪いといったネガティブなイメージを持っている場合が多いように感じます。

ただ最近では、「どうもあいつは変わり者」とか「社交性がない」といったネガティブな評価だけでなく、むしろ「特定の分野に造詣が深く、奥義を究めようと打ち込んでいる」というようにポジティブに受け止められる傾向にあり、「オタク」に対する評価も時代と共に変化して来ているように感じます。

さて、趣味というと、それは専門（本業）としてではなく自分の楽しみとして取り組んでいるものをいいますが、いくら趣味とはいっても、中にはプロ顔負けの知識や技能を誇る人もいます。そんな人を見ていると、「これは相当のお金と時間を掛けているな」といつも感じます。

私を含め大抵の人は、興味や関心があり、また、好きな事ではあっても、そうそうはお金も時間も掛けられませんので、結局は、何をやらせても中途半端というのは避けられません。これに比べると「オタク」と称される人は、自分の好きな事にはお金も時間も惜しみなく投入するという意味で、普通ではありません。その粘着力、集中力、こだわりには敬服するものがあります。ただ、いくら「オタク」といっても、皆が皆潤沢にお金と時間がある訳ではありませんから、我が身を振り返らず一つ事にのめり込むと、家庭破壊や家計の破綻を招きかねません。

幾ら自分の好きな事でも、そこはお金と時間のコントロールが必要不可欠です。

ご自身が消費生活アドバイザーという仕事のかたわら、コミックレビューをやっている程のマンガ好きと自称する山崎俊輔氏は、趣味への出費の割合を月収で割って100を掛けた数字を「オタク係数」と定義し、趣味に使うお金は10%以下が

理想、20%は危険信号で、25%以上は家計が破綻する恐れがあると警告しています（9月17日付日本経済新聞）。

趣味に月収の10%も掛けるというのは多いのではと一瞬思ったのですが、いや待てよ、飲み会等のお付き合いに掛けるお金の事を考えたら何の事はない、「オタク」の事を心配する前に私自身が危険水域に入っているなど、思わず冷や汗が出て来ました。（塾頭：吉田 洋一）